

平安京跡現地公開資料

2009年4月18日(土)
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

遺跡名：平安京左京七条一坊四町跡
調査地：京都市下京区朱雀正会町
調査期間：2009年3月9日から継続中
調査面積：約335㎡

はじめに

この調査は、京都七条公共職業安定所千本労働分室新築工事に伴う発掘調査です。調査地は平安京左京七条一坊四町にあたり、平安京の迎賓施設である東鴻臚館があった地点です。桃山時代には豊臣秀吉によって京の周辺に巡らされた御土居の堤にあたります。北西100mには堂ノ口町遺跡(古墳時代から奈良時代の遺物散布地)、西400mには衣田町遺跡があります。

調査区内は、北側の中央部分以外は、既存建物の基礎などにより深く掘り下げられていましたが、井戸や溝などの深い遺構が残っていました。

調査の成果

調査では、桃山時代・鎌倉時代・弥生時代の遺構を見つけることができました。

桃山時代

御土居 堤の盛土が一部分残っています。厚い部分で0.3mあり、小さい石や鎌倉時代～室町時代の土器片が多く入っています。今までの調査から御土居の基底部の幅は20～22mあったことが分かっています。この調査区のほとんどが御土居の堤部分にあたります。調査地の西側は、御土居堀に推定されていますが、調査地より約0.8m低くなっており、御土居の地形が残っているものとみられます。

鎌倉時代

溝12 調査区南部で検出した東西方向の溝で、幅は2.0～2.3m、深さは0.5～0.7mあり、東側で南に曲がっています。溝の南肩付近からは小型の軒瓦が出土しています。北肩部には12世紀末～13世紀初頭の土師器皿が集中している部分があり、溝の北側から捨てられたとみられます。溝内には水が溜まっていたことが分かりました。堀のような遺構であったとみられます。

井戸14 調査区北東部にあります。掘形は一边が約2.4mの隅丸方形で、井戸の内部構造は、一边が約0.9mの正方形で、縦板横棧の井戸枠の痕跡がみられました。深さ約1.9mまで残存し、埋土からは12世紀末～13世紀初頭の土器類や瓦が出土しました。

平安時代

平安時代前期には調査地の左京七条一坊四町と北隣の三町は東鴻臚館に比定され、遺物

は少量出土しましたが、関連する遺構は見つかりませんでした。

弥生時代

溝17 調査区西部で検出した南北方向の溝で、幅は1.0～1.2m、深さ約0.5mを測ります。溝からは弥生時代中期の壺や甕の大きな破片が出土しています。

土坑31 中央北側の東側の高まり部分で、幅1.7～2.1m、長さ4.6m以上、深さ0.2mの土坑(穴)が見つかりました。ここからは、弥生時代の壺の破片が出土しました。

土坑32 土坑31の下層で見つかりました。幅1.1m、長さ2.4m以上、深さ0.12mを測ります。土坑31・32は溝17を周溝とする方形周溝墓の主体部(墓坑)の可能性がありません。

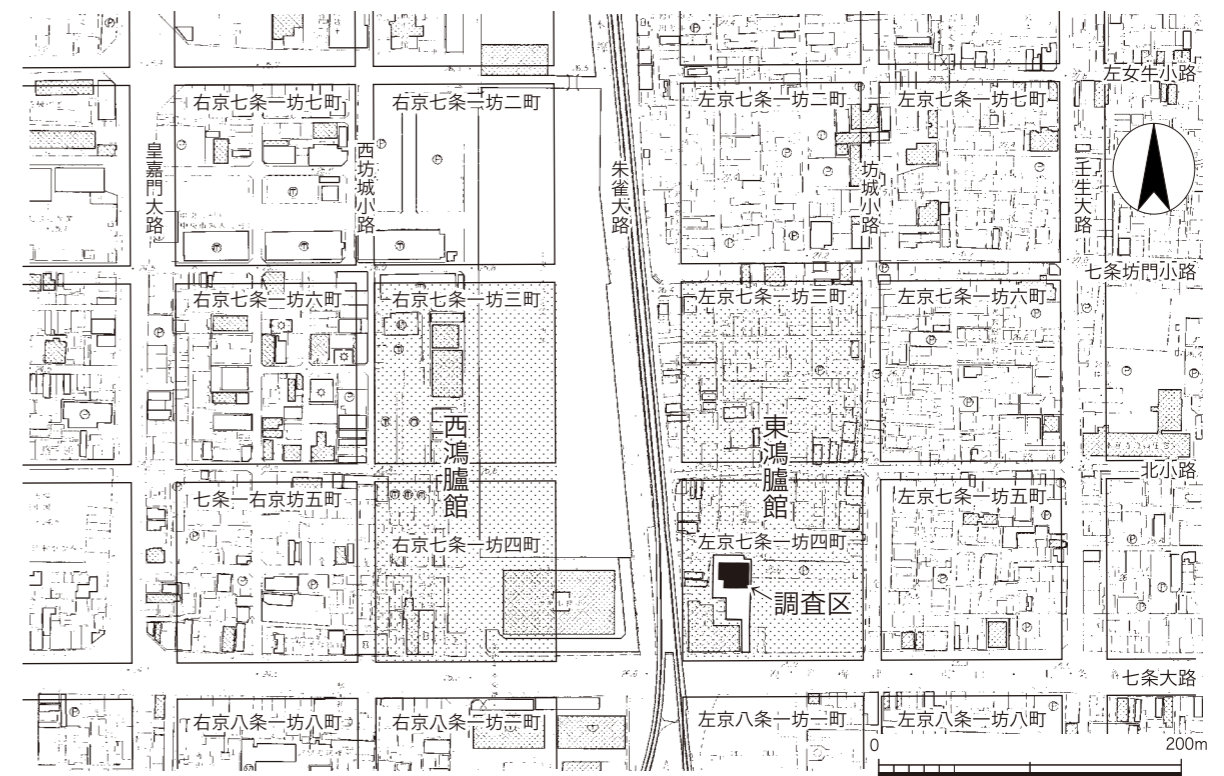
まとめ

西400mの衣田町遺跡では方形周溝墓が2基見つっていますが、当調査地周辺は弥生時代の遺跡の空白地でした。今回、溝や土坑を検出したことから、弥生時代中期には近くに集落が営まれていたことが明らかとなりました。

平安時代の当地は東鴻臚館に比定されていますが、遺構は見つかりませんでした。中世以降の開発で削平されたものと考えられます。

鎌倉時代の遺構・遺物が見つかったことから、この時期には市街地として再開発されたとみられます。堀を巡らせ、瓦を使用した建物が南側に推定できます。

桃山時代には、御土居が築かれました。丹波口のすぐ南側に位置し、重要な地点であったと思われます。



平安京条坊(1:5,000)

